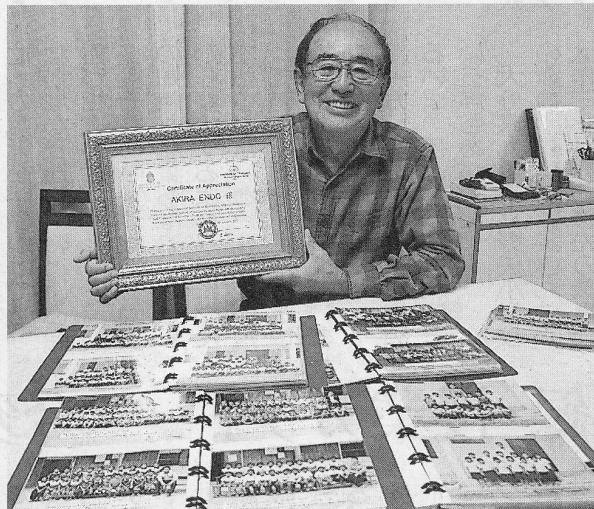


「思い出」贈る カンボジアでクラス写真



学校のクラス写真を子どもたちに贈る活動を続け、カンボジアの教育省から感謝状を受けた遠藤啓さん=伊豆の国市

全日本写真連盟の会員でもある遠藤さんがカンボジアを初めて訪れたのは2002年。定年の1年前に会社を退職し、「21世紀の力企画したカンボジアへのツアーパートナーを募る記事を見たのがきっかけだった。ツアーパートナーを募る記事を見た。

カンボジアの田舎に興味を抱いたのには、理由がある。同国の高官と結婚して首都プノンペンに暮らし、1979年6月に帰国したアーチーでは、世界遺産のアンコールワットを見学できる

カンボジアの子どもたちに「思い出」の品を残してあげようと、学校のクラス写真を撮影し、贈り続けている男性がいる。伊豆の国市の遠藤啓さん(75)。活動を始めて15年が経ち、1月にはカンボジアの教育省から感謝状を受けた。

伊豆の国 遠藤啓さん

170万人が虐殺や病気で命を落としたといわれるポル・ポト政権(1975~79年)下の体験談。夫は運行され、親族は全員離ればなれに。自身と子どもも田舎に連れて行かれ、強制労働をさせられた。悲痛な体験をした田舎とは、どんなところだったのだろう。

職場生活を終え、現地を自身の目で見てみたいという思いが強くなつた。現在でこそ経済成長が著しいカンボジアだが、遠藤さんは最初に訪れた頃はブノンペンでさえも電気事情が悪く、ホテルにもロウソクが置かれていた。道路も田舎は未舗装。現地の女性と結婚し、店を営んでいた日本人の男性からは「カンボジアの子どもたちは1枚も写真を持っていない。内戦の影響で親も持っていない人がほとんど」という話を聞かされた。

「写真が1枚もないのはあまりに寂しいと思った」と遠藤さん。プリントでかかるカメラで子どもたちの写真を撮つて渡すと、「もっと撮つて」と何度も写真を見つめている姿に、日本では気付かなかつた写真の価値を見えた。

(常松鉄雄)

写真があれば、10年、20年先でも家族や友人、その家族までを思い出すきっかけになる」。遠藤さんは翌年以降、支援する会の会員としてツアーに参加。田舎の小学校に文具や菓子を配りに行くたびにクラスの集合写真を撮影し、帰国後、プリントして届けるようになった。

現地でできた友人らに学校を紹介してもらい、現在は幼稚園や中学校にも撮影に出向く。ある時、かつて1回訪れた小学校を再訪すると、女の子が近寄ってきて「以前撮つてもらった」と写真を持ってきて見せてくれたという。「あの時は本当に感激して胸が熱くなった。そんなことがあるから、今も続いている。これからも続けていきたい」

「喜ぶ顔がみたい」と活動15年

写真があれば、10年、20年先でも家族や友人、その家族までを思い出すきっかけになる」。遠藤さんは翌年以降、支援する会の会員としてツアーに参加。田舎の小学校に文具や菓子を配りに行くたびにクラスの集合写真を撮影し、帰国後、プリントして届けるようになつた。

現地でできた友人らに学校を紹介してもらい、現在は幼稚園や中学校にも撮影に出向く。ある時、かつて1回訪れた小学校を再訪すると、女の子が近寄ってきて「以前撮つてもらった」と写真を持ってきて見せてくれたという。「あの時は本当に感激して胸が熱くなった。そんなことがあるから、今も続いている。これからも続けていきたい」

昨年は6、7、11月に現地入りして撮影。1月にも現地に赴き、教育省から感謝状を受け取つた。これまで撮影した子どもたちの人数は1万人をはるかに超えるという。遠藤さんは「子どもたちの喜ぶ顔がみたいう気持ちだけでやつてきた。地道な活動をカンボジアの人たちが分かってくれたことがうれしい」と笑顔を見せた。

子どもたち撮影続け、現地教育省から感謝状

写真があれば、10年、20年先でも家族や友人、その家族までを思い出すきっかけになる」。遠藤さんは翌年以降、支援する会の会員としてツアーに参加。田舎の小学校に文具や菓子を配りに行くたびにクラスの集合写真を撮影し、帰国後、プリントして届けるようになつた。

(常松鉄雄)